

東洋における気思想

黒木賢一

はじめに

「気」という言葉は日本語としても様々な場合に用いられている。その表現を分析すると大きく三つに分類される(黒木, 2001)。一つは心身に関することで、「病気」, 「気分が良い」, 「気色が悪い」, 「気が晴れる」などの表現がある。二つは人間関係のことで、「気が合う」, 「気にさわる」, 「気が置けない」, 「気にかける」などの感覚的なものがある。三つは自然との関わりで「天気がいい」, 「気温が高い」, 「空気が悪い」, 「気化する」などと表現されている。これらでも分かるように, 気は心身に流れ, ところの情報として他者との間を行き交い, 大自然とのつながりを持つものとして日本文化に根づいている。最近の気の研究における認識は, 廬ら(1993)によれば, エネルギー説, 物質説, 情報説という三種類の存在様式があり, 三者の関係は密接であるという。また, 物質とエネルギーとは相互に転換しうるものであり, 気の運行そのものが情報としての物質とエネルギーとに依拠しており, それだけでは存在できないものであるという。このような気存在を支えてきた思想には, 壮大かつ深遠な中国四千年の歴史が横たわっている。それは森羅万象から読み取られた考え方である。本稿では, 「気」と呼ばれる概念の奥に潜む東洋思想について検討を加えたい。まず万物生成のプロセスの根本思想である陰陽五行論について述べる。次に『易経』とは何かを説明し, 易占による方法論を示し, 易占が占いという次元を超えた宇宙観を持ち, それらが日常生活に関わり, 循環していることを示したい。

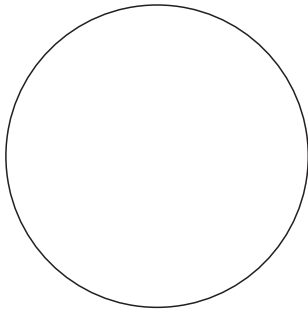
1) 「陰陽五行」の世界観

1 陰陽論

東洋における万物の生成論では, 無極の混沌である気一元から, 物質の基礎としての陰陽二気が生じ, それらがお互いに抱きあいながら消長を繰り返している。図1の太極図は, 円の象徴として, 一なるもの, 太極, 空, 虚, 無を表し, 図2では一なるものが二分割され, 陰と陽を表したものである。楊(1992)によれば, 「太極とは, 時間的, 空間的無限を意味しており, 無極とは, 無方向・無形状・無限量である大始の混沌とした元気を示し, そこでは道は一を生ずる」という。この天地宇宙を現した円の中に表された陰陽二気では, 陰の中にも陽があり, 陽の中にも陰があり, 絶えず流動し循環しながら調和を保っている。

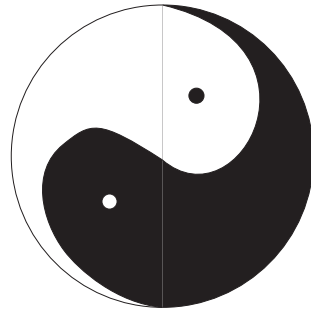
混沌とした無極としての一元の「気」とはどのようなものであろうか。それは「気」という文字から古代人がどのように気を捉えていたかが伺える。「気」の字は象形文字「气」まで遡ることができ, 雲または雲となる気体の流動したイメージとして古代人は捉えてい

(図1) 太極図A



『周易と中医学』より

(図2) 太極図B



た(前川, 1978)。この字は、ゆらゆらとした雲のような気体のイメージであり、実体としてとらえがたいが存在しており、留まることのない流動した「いのちの働き」の表現として捉えていたと思われる。「氣」の字は「氣」を簡略化したもので、芻米を饋るという意味があり、「米」という意符と「气」という声符から成り立っている(前川, 1978)。食物としての「米」は大地のエネルギーであり、それを食することで体内のエネルギーに変えていくことから、「氣」という言葉を自然界と人体に関する概念として捉えていたのだろう。

古代人は、自然と共に生活する中で、自然の現象がすべて2つの大きな事象(陰陽)に分けられていることを当然のこととして受け入れていた。朝になれば、東から太陽が登り明るくなり、夕方になれば西に太陽が沈み暗くなり月が出る。夜から朝になることで陰陽のエネルギーが刻々と変化していく。陰と陽の純粹な時間はほんの一瞬しかない。一日のうちでも陽中の陽→陽中の陰→陰中の陰→陰中の陽に変化し留まることのない動きがある。常に相反する陰陽が必要であり、バランス(調和)の中で自然は息づいている。朝、陽のエネルギーが盛んになり目覚め活動する。夕方になると次第に陰のエネルギーが強くなり、活動も鈍くなり眠さが出てくる。陰陽の流れによって、一日のリズムや体の調子を保っている。陰陽のバランスが崩れると心身の状態が狂ってくる。四季にも循環があり、春になると暖かくなりすべての動植物が活発になり、秋になると寒くなり活動が低下していく。見上げれば天があり、足下には地がある。2つの事象では、活発、明るい、温熱、上昇、外向なものを陽と呼び、静か、暗い、寒冷、下降、内向なものを陰と呼んだ。春が近づくと陰中の陽から、真夏の陽中の陽になり、秋が近づくと陽中の陰になり、真冬になると陰中の陰になるというサイクルがある。

また、人体も上部・体表・背中が陽とし、下部・体内・腹部は陰として考えた。こころの状態は、明るい・ウキウキ・軽いなどが陽とし、暗い、沈む、重いなどを陰とした。こころも身体も自然の事象に対応するものと捉えていた。自然を「大宇宙」とし、また人間を「小宇宙」と対比させたのはこのようなことから伺える。それは、人間も自然の一部としてとらえ、自然と共に生きている有機体として、すべての事象が相対立する陰陽の強

弱をもってバランスをとっているという事実に気づいていたからである。暑い夏（陽）から寒い冬（陰）に変化すると共に、気分は開放的な陽から閉鎖的な陰になる。「陰・陽」という2つの事象が自然の流れであると身をもって知っていた。このような古代人の知恵から「陰陽論」が生まれてきたのである。

陽が盛んで静まらず勢力を保っていると、体がほてり、目がさえて眠れない。また気持ちもイライラして落ちつかない。水の性質が不足しやすく便秘になったり、喉の乾きで水分を必要とし、のぼせが起こり、顔も赤みがかかる。逆に陰が盛んになっていると、昼間でも眠くなり、力が出なかつたりする。熱の要素が少なく、水の要素が多くなり、寒が起こり、下痢気味になる。全体的に活気が低下し、顔色も悪くなる。このように陽の盛んな状態を「実証（陽証）」、陰の盛んな状態を「虚証（陰証）」と東洋医学ではいう。陰陽のバランスの崩れは様々な要因によって起こるので、全体を診なくてはならない。また、私たちが「気が重い」と感じるときには陰の気が過剰になり、「気が散る」というときには陽の気が過剰な状態になっている。どちらが多くても陰陽のバランスが崩れる。その時の気とはこころの状態のことを示している。あることが気になり、そのことばかりが頭の中をめぐり、イライラしたり、落ち込んだり、不安になつたりする。それは思いの深さであり、形態が異なる気の現れであり、「情報としての気」と捉えることができる。

人間も自然界に生きる動物であるがゆえに、この陰陽の法則のもとに生き、人体の気もバランスをとりながら巡っているという考え方が気功などで用いられる広義の気概念である。一方、東洋医学では気を人体という部分に集約し、その役割をより細分化させ気血水という身体を構成する物質の一つと考えており、緻密に身体の気メカニズムとして捉えている。これは狭義の気概念といえる。このような気概念が物質的な意味から広義の気概念を有するようになったのは、道家（老子・荘子）の影響を受け、陰陽論に結びつくようになってからである。

『老子道德経』の上編第1章は「無名天地之始，有名万物之母」（名無は天地の始め、名有は万物の母）というタオ（道）の本質を表す根元から始まっている。これは<原初>なる「無」から<現象>としての「有」が生じるという意味であり、この二つのリアリティは、名がつくことで、前者を<道>といい後者を<万物>というように表現されている。しかし、その根本は同じであり、その深遠さを「玄」と表現している。また、「道生一，一生二，二生三，三世万物。万物負陰而抱陽，沖氣以為和。（道は一を生じ、一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ず。万物は陰を負いて陽を抱き、沖気を以て和を為す）下編42章」と述べられている。これは道という一の世界から、微細なる働きとしての気が躍動し陰陽の二気が生じ、その陰陽の気の働きからこの世のすべてを創造し、二つを媒介する沖気によって調和が生じるというのである。このように、万物の根本を意味する陰陽思想と結びつき、気は大宇宙（大自然）と小宇宙（人体）に繋がり流れ動く概念として大きく捉えられるようになったのである。

山田（1995）は、生成論の構造的な相違について、空間分割の形式から思考法の原初的な形式が発生していると捉え、『老子』と『易』を比較した考察がある。図3で示すよう

に、混沌とした無極の円を分割するには、上下の二分法と内外の二分法の二通りがあり、内外二分法の場合、同心円構造の内円は、この状態では決して分割されることのない混沌の状態であるという。これらの二分法が、『老子』と『易経』での思考の違いであり、それを比較したのが図4である。『易経』では、太極から両儀、四象、八卦と徹底した二分法になっている。『老子』では、「一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ず」となっており、三分割の次は万物で五分割になっている。この「五分割は五行にほかならず、五行は万物を包含する分類のカテゴリー」であるという。図5は五行のカテゴリーを示している。

この山田の論考に関して、三浦(2000b)は、「五行思想と『老子』の生成論をいとも易々と、かつあざやかに繋いでいる」と賞賛し、「後世になると『老子』の陰陽論と五行思想が沖気を媒介にして重ねて把握されるようになる」と述べている。このことに関して、「内円こそが沖気であり、沖気が五行の中央土を結合して」と論じ、その論証として、五行の中央土の性格が「万物は陰を負い陽を抱き、沖気を以て和を為し、和は中央に居る。是を以て木の実は心に生じ、草の実は莢に生じ、卵胎は中央に生ず(『文子』)」の一文を示し、「和は中央に居る」として、和=沖気を中央にしているのだと論を発展させている。さらに三浦は、中央土と沖気を結合させている周濂溪の図6の「太極図」を取り上げている。この図は、上から第1の円が太極を表し、第2の円が陰陽の二氣に分化して、次に五行を表している。そして、第4が男(陽=天)と女(陰=地)の交合した一つの円として描かれ、第5は万物が生成される円を象徴化したものである。この図の中央に位置する、五行カテゴリーの中心に土が置かれており、陰陽論から出てきた沖気と一体化し、土=沖気が「媒介的な性格」として表されるようになったと論じている。

2 五行論

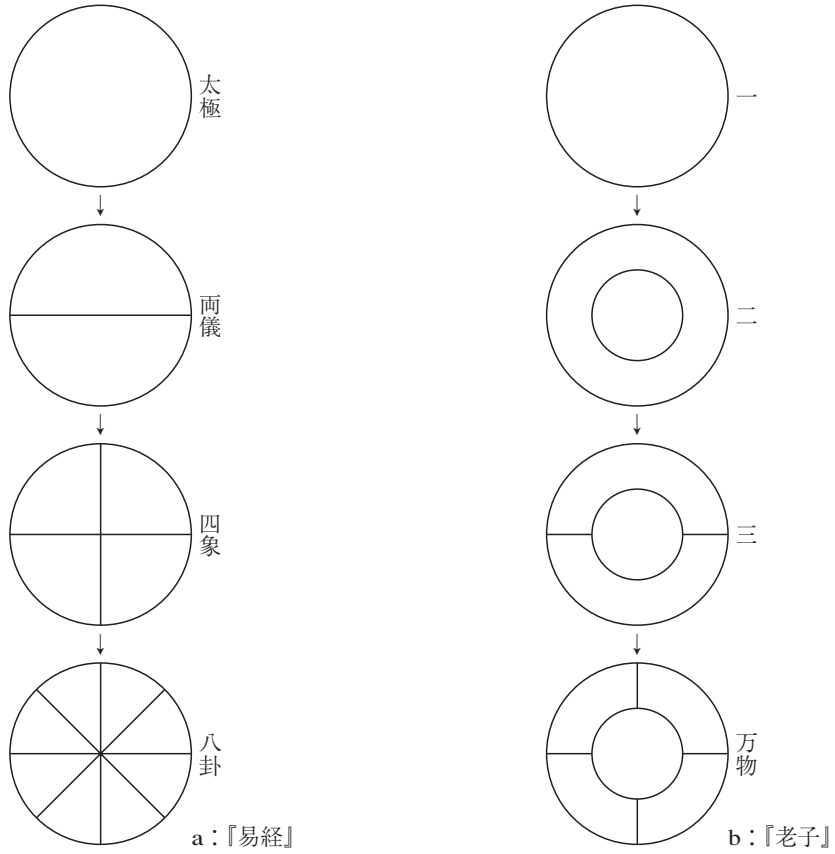
次に五行論について説明する。古代人は、森羅万象における様々な現象や形を5つの要素で成り立っていると考えた。その要素とは、木・火・土・金・水であり、それぞれにもつ特性がある。自然の要素としての五行の特性は、「木」とは樹木のように柔軟にのびる性質。「火」とは炎や熱のように昇発急速の性質。「土」とは土の中で生まれる、豊満重厚な性質。「金」とは透明でさらさらした性質。「水」とは下に流れ固まる性質。このような性質をもとに、自然界や人間の身体の性質をあてはめて理解していた。それらの性質を自然と人体に分け、5つの要素に分類したのが表1である。

石田(1992)によれば、「五行論自体は「時令」と呼ばれる四季それぞれにふさわしい政令を盛りこんだカレンダーのような書との関係で、循環の諸関係を磨き上げていったように思われる」という。図7は時令の枠組と五行の相生説と相剋説を示したものである。時令の枠組の図を見てみると、東西・南北の四方に、春秋・夏冬の四季を配当しており、木金・火水に中央の土を加えて五行のカテゴリーができあがっている。このような四季折々の現象と様々な諸事象が五行の特性と関連づけられて、飛躍的に豊かな内容をもつことになったと石田は論じている。

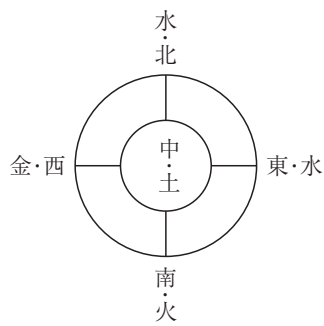
(図3)



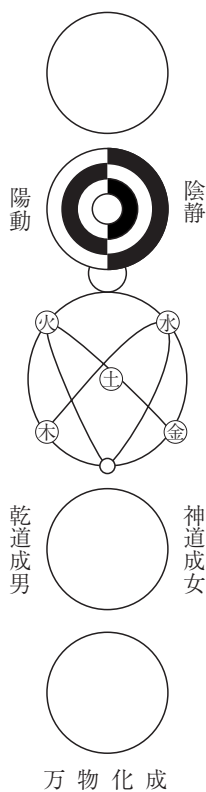
(図4)



(図5)



(図6) 周濂溪の「太極図」



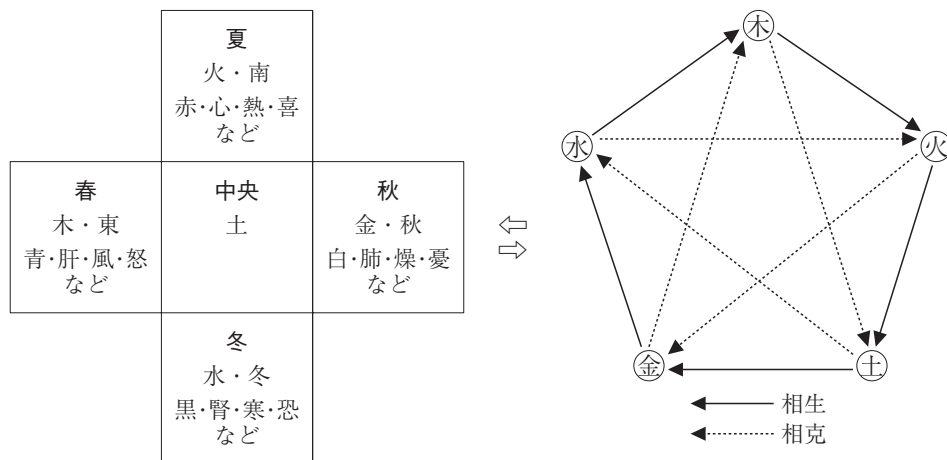
『道教の生命観と身体論』より

(表1)

	五行	木	火	土	金	水
自然界	五季 五方 五气 五色	春 東 風 青	夏 南 暑 赤	長夏 中 湿 黄	秋 西 乾 白	冬 北 寒 黒
人体	五臓 六腑 五志 五神	肝 胆 怒 魂	心 小腸 喜 神	脾 胃 思 意	肺 大腸 悲 魄	腎 膀胱 恐 志

五行の特性とその働きについては「相生」と「相剋」という概念がある。「相生」とは、一つの勢いが盛んになれば、ほかのものも盛んになる働きが循環することをいう。図7では実線の矢印で示している。木が燃えると火（木生火）になり、その灰は土（火生土）になり、土の中で金（土生金）になり、金は溶けて水（金生水）に、水は木（水生木）を生

(図7) 時令の枠組と五行相生と相剋説



『中国医学思想史』より

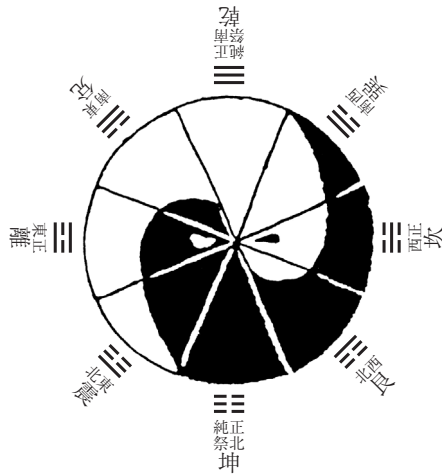
み出すといった循環関係のことをいう。また相生の関係は「親子関係」に例えられており、木生火では木が母で火は子になり、火生土では火が母で土が子になるといった関係がある（根本，1991．神戸中医学研究会，1999）。相剋とは、五行がお互いの勢いを抑制する働きをし、その関係の中で循環することをいう。図では点線の矢印で示している。木は土から養分をもらい（木克土）、土は水を必要とし（土克水）、水は火を消すことができ（水克火）、火は金を溶かし（火克金）、金（物）で木を切る（金克木）といった循環がある。木は土の勢力が大きくなるのを抑制し、土が抑制されすぎて小さくなるとバランスが悪くなり、土によっても育てられている。そして、木の勢力が大きくなるのを金が抑制するといった相互関係がある。このように相剋と相生は5要素のつながりと循環の中で大きさを強めたり弱めたりしながらお互いのバランスをとっている。

また、自分の勢いが非常に弱くなると相手の勢いが強くなり、抑制している相手に逆に抑制されることが起こり、益々勢いが弱まることを「相侮」という。相剋の関係においては、抑制されるものが弱くなりすぎるとそれに応じて抑制がさらに強まることで、より弱くさせることを「相乗」という。仙頭（1993）は治療においては、相生と相剋がスムーズに働くように考え、相侮と相乗が起きないようにコントロールすることが重要だと東洋医学の視点から述べている。

2) 「易」の思想

『易経』は「周易」とも呼ばれ、中国の古来からあった占いを、周の時代（紀元前12世紀）に完成したと言われている。『易経』という経本は、陰陽八卦を基本としてなる六十四卦（表3参照）の内容がまとめられており、本文は上・下の二経に分かれ、その解説として十篇が加えられ一冊になっている。これは伏羲が八卦を画し、文王がこれを六十四卦に進化させ、文王と周公が卦爻を加えて孔子が十翼（易の本文の十篇の解説）を作ったとい

(図8) 趙仲全の「古太極図」



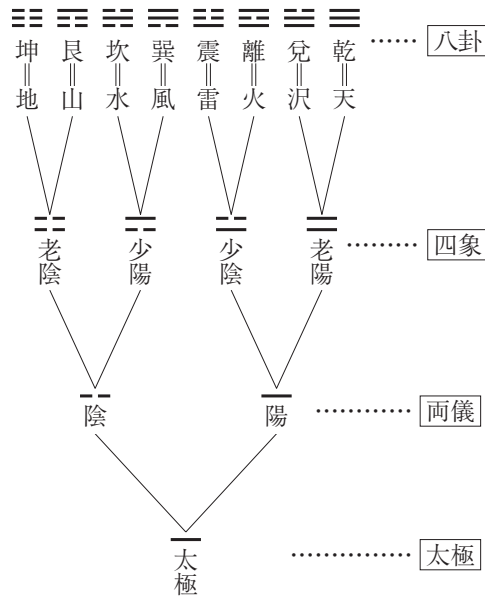
『不老不死という欲望』より

われている（高田ら，1969；吉野，1984）。『易経』は儒教の教典の「四書五経」の中に含まれている。四書とは『大学』『中庸』『論語』『孟子』，五経とは『易』『詩』『書』『礼』『春秋』のことをいう。「経」という文字は，もともと織物の縦糸という意味だが，それから発展して，道筋，人の生きる道，天下国家の道，さらには宇宙を動かす道（法則）を表すようになった。日本に『易経』が伝えられたのは五・六世紀だといわれている。また，臨床心理学の領域においては，カール・ユングが中国学者のリヒアルト・ヴィルヘルム訳『易経（the Book of Change 変化の書）』に「易と現代」と題した序文を書いている。ユングは序文を書くにあたって，易経を英語圏の読者に伝えるためかなりの工夫と努力が伴った内容を意識している。ユング（1983）は「唯一の問題は，易経の占いの方法が実際に利用できるかどうか，そしてそれらが有効であるかどうか，ということであった」と述べている。臨床家としてのユングは東洋の神秘的な易経に対して実際的な側面から，自ら易をたてることによって，実証的な説明を試みた唯一の心理学者であった。

次の図8は明の時代に描かれた趙仲全による「古太極図」である。円の中には黒（陰）と白（陽）の二気がお互いに抱き合うように描かれており，円の外には「易経」の八卦の文字が書かれている。三浦（2000a）によれば，この図は外円を太極として，そこから陰陽が分かれ世界が生まれ，陰（坤＝地）陽（乾＝天）を示す空間的な配置だけではなく，時間的な季節の流れ，下から時計回りに陰（坤＝冬）陽（乾＝夏）をも表しているという。この太極図の外円に描かれている八卦の文字は，（乾 ☰），（兌 ☱），（離 ☲），（震 ☳），（巽 ☴），（坎 ☵），（艮 ☶），（坤 ☷）であり，陰陽の記号で表されている。

易の思想の中心は，太極である気一元から始まり，気二元としての陰と陽に分離することである。陽を—，陰を--の記号で表す。陽の爻は陽爻といい能動的な要素をもち，陰の爻は陰爻といい受動的な要素をもつ。『繫辞伝』では「易に太極あり，これに両儀を

(図9) 「八卦図」



『易と日本の祭祀』より

生ず。両儀は四象を生じ、四象は八卦を生ず。」といい、図8は八卦の生成過程を説明したものである。この八卦の二つの組み合わせ（二乗）で六十四種類の得卦が得られる。表3の六十四卦一覧表を参照してもらいたい。

図9は下から上に、「太極」である気一元が、「両儀」の陰陽二気に分かれる。次に、陽は老陽（陽と陽（☰））、小陰（陽の中に陰の要素が入り込み（☱））、陰は老陰（陰と陰（☷））、小陽（陰の中に陽の要素が入り込み（☶））の四つの気の働きとしての「四象」に分離していく。この分離の法則で、次に八方向への気の働きである「八卦」が生じてくるのである。これを自然現象に対応させ、天（=乾）、沢（=兌）、火（=離）、雷（=震）、風（=巽）、水（=坎）、山（=艮）、地（=坤）に配当している。

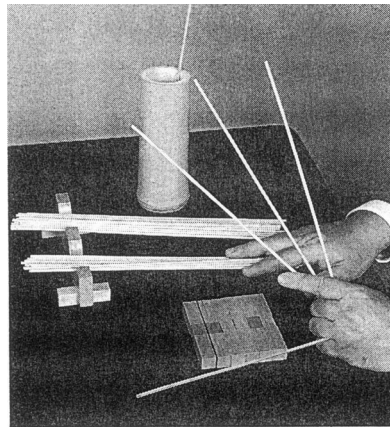
この八卦は自然の事象のみならず、人間、属性、動物、身体、方角などにはあてはめられており、それぞれで万物を象徴化している。乾坤二卦は陰陽の始まりであり、「天・地」があり万物が生じ、「父・母」がおり子が生じ、また「健・順」といった属性が生じるのであり、そこに易の根本思想がある。

次に易の占い方を紹介する。易占具は写真1で示されている^{ぜいちく}、筮竹、筮筒、算木、格台を用いて行う。卦をたてるのに必要なものは筮竹と算木があればよい。筮竹は約30センチの竹ひご50本と算木は長さ10センチほどの角材6個、角材の隣り合う二面の中央に2センチ程削り溝があり赤色に塗られている。筆者が現在、大阪の朝日カルチャーセンターで行っている「気の心理臨床学」講座のプログラムの中に「易経を心理学する」があり、ここでは易占いの筮竹と算木を手作りしている。筮竹は100円ショップで「バーベキュー串

(表2) 八卦の卦象

兌 ☱	艮 ☶	離 ☲	坎 ☵	巽 ☴	震 ☳	坤 ☷	乾 ☰	
沢	山	☉火	☵水	☴風	雷	地	天	自然
少女	少男	中女	中男	長女	長男	母	父	人間
説 <small>よ</small>	止	麗 <small>く</small>	陷	入	動	順	健	属性
羊	狗	雉	豕	雞	竜	牛	馬	動物
口	手	目	耳	股	足	腹	首	身体
西	東北	南	北	東南	東	西南	西北	方角

(写真1) 易占法



『未斎流易』より

「(50本入)」を購入し、先端をハサミで切り取りとると26センチぐらいの竹ひごが出来上がる。算木は10センチほどの角材6個を用意し、角材の隣り合う二面の中央2センチほどを赤色のサインペンで塗る。このような簡単な方法で手作りした筮竹と算木を受講生は使用している。

筆者は易占法については、伊藤未斎(故・高森一徳)先生から指導を受け、「未斎流」を学んだ。この易占法は「略筮法」で、江戸時代の新井白蛾が考えだした方法である。古来の易占法には「本筮法」「中筮法」があり、また簡単な方法として三枚のコインの裏表を用いる「擲銭法」がある。未斎流の略筮法は次の要領で行う。

- ①50本の筮竹から1本を抜き取り筮筒に入れる。この1本は「太極」と呼び、易の神様が宿るとされている。
- ②49本を扇形に開き、無念無想で左右両手に分ける。左手の筮竹を「天」、右手の筮竹を「地」に象る。右手の筮竹を格台におき、1本抜き取り、左手の小指と薬指の間にはさむ。この1本を「人」に象る。ここで、「天・地・人」の三才が一つになるのである。
- ③左手に残った筮竹を右手で2本ずつ「春・夏・秋・冬」とつぶやきながら、8本ごとに右手に移し替える。最後に残る数は0～7本になり、左手にはさんでいる1本を加えた数が小成卦しょうせい卦を示す数字になる。残りの数が1本（天 ☰）、2本（沢 ☱）、3本（火 ☲）、4本（雷 ☳）、5本（風 ☴）、6本（水 ☵）、7本（山 ☶）、8本（地 ☷）を示している。ここで得た卦が下卦げ卦（内卦ともいう）である。
- ④次に上卦じょう卦（外卦ともいう）を出すために②～③の作業を行い、下卦げ卦（三爻）と上卦じょう卦（三爻）を合わせて大成卦たいせい卦（六爻）が出たことになる。最後に変爻を知るために②の作業を行い、③の作業では、左手に残った筮竹を右手で2本ずつ「天・地・人」とつぶやきながら、6本ごとに右手に移し替える。最後に残る数は0～5本になり、左手にはさんでいる1本を加えた数が変爻を示す数字になる。合計が1本（初爻）、2本（二爻）、3本（三爻）、4本（四爻）、5本（五爻）、6本（上爻）を示す。目印のため、算木を左右いずれかに少しずらしておく。これで大成卦と変爻が分かったことになる。

変爻とは1つの爻の陰陽が反転することであり、それによって卦の内容が変化することをいう。表3の六十四卦一覧表を見ていただきたい。六十四卦にはそれぞれに卦名がついている。例えば、乾为天は天が乾為の卦名といった形式になっている。卦名には得卦を象徴する一字或いは二字が配当されており、得卦に卦名を加えたものを大成卦という。また、「卦辞」は、得卦に何故その卦名がつけられているのかとか、大成卦が象徴する運勢を説明したものである。「爻辞」は、大成卦が今後どのように変化していくのかを知るための6つの文章のことである。

図10は、未斎流の易断の基本的な考え方を示したものである。①問い、②六十四卦、③太極の宇宙観、円が重なった部分が④易断になる。未斎流の易の特徴として、「周易」の六十四卦がすべてであり、易者が易占いによって得た卦（得卦）と、問い（問題）とを組み合わせて、太極の宇宙観の視座から易断を行う。1つの卦を分析するには、易者自身の易的な生き方によって真反対の易断が出ることもある。その意味では、易者の体験による生き方が反映され、人格が要求される厳しい世界である。伊藤（1997）は、矛盾に満ちた現世を陰陽の要素で冷静に分析し、依頼者が失意の時には、易者は依頼者を励まし、得意の時には縛め、問題の正しい解決法を見いだす契機を提供するものであると指摘している。そのようにするには、伊藤（1994）は『周易本義』の文章を用いて、易経そのものが「自分自身の得にひきくらべて、象占を読み」、「己の得を内省する書」であることを肝に銘じ

(表3) 六十四卦一覧表

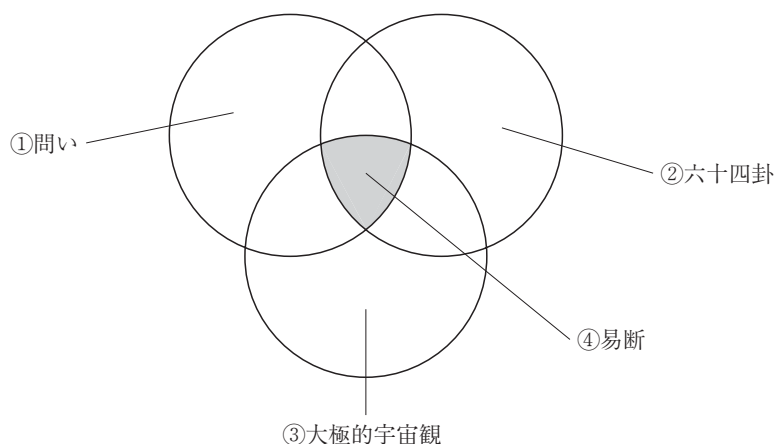
(坤) 地	(艮) 山	(坎) 水	(巽) 風	(震) 雷	(離) 火	(兌) 沢	(乾) 天	上卦 / 下卦
地天泰	山天大畜	水天需	風天小畜	雷天大壮	火天大有	沢天夬	乾意天	天(乾)
地沢臨	山沢損	水沢節	風沢中孚	雷沢歸妹	火沢睽	兌意沢	天沢履	沢(兌)
地火明夷	山火賁	水火既濟	風火家人	雷火豊	離為火	沢火革	天火同人	火(離)
地雷復	山雷頤	水雷屯	風雷益	震為雷	火雷噬嗑	沢雷隨	天雷无妄	雷(震)
地風升	山風蠱	水風井	巽為風	雷風恒	火風鼎	沢風大過	天風姤	風(巽)
地水師	山水蒙	坎為水	風水渙	雷水解	火水未濟	沢水困	天水訟	水(坎)
地山謙	艮為山	水山蹇	風山漸	雷山小過	火山旅	沢山咸	天山遯	山(艮)
坤為地	山地剝	水地比	風地觀	雷地豫	火地晋	沢地萃	天地否	地(坤)

『未斎流易』より

なければならいという。

問いは、悩みや問題を明確にして問いとして意識化することに意味がある。その問いが個人的なことであったとしても、個人の人生の流れには偶然性はなくすべてが必然であり、宇宙の法則性によって突き動かされていると思われる。六十四卦は、宇宙の法則に則った人生の流れを指し示す地図であり、指標としての役割を果たしている。それは、迷宮から脱するときのエッセンスともいえる。太極の宇宙観とは、言い換えれば易の思想のことであり、次の3点に集約されている。1つは、陰陽の二つの属性からあらゆる事物の現象が現れてくること。天と地、光と闇、男と女というように、相反する属性があり、そのバラ

(図10)



ンスを取ることで流れが創られる。2つは、陰陽の流動する変化によって「天地人」の三才の道を示していること。陰陽二気の働きが、天と地と人を結びつけており、それらを合一することが易の道を生きることとつながる。3つは、「易の三義」としての変易、不易、易簡から道を読み取る思想である。変易とは「変わりゆくこと」を意味しており、世の中の現象はすべてこの陰陽の相剋によって働きが起り流れが出てくる。その段階でもまた陰陽が相剋し、次の段階へと移る。このように絶えず移りゆく変化が無限に続くという思想である。不易とは「変わらないこと」を意味しており、自然界で起こる人事を超えたあらゆる現象、人として生きていくときの価値観、道徳、親子の情など時代を超えて変化しないものである。易簡とは、易占によって得た卦の啓示をもとに、問いに対してあらゆる角度から簡明に解き明かすことをいう。陰陽は絶えず変化しているものであるが、その中に一定の不易の法則があり、それらは矛盾するものではない。「栄枯盛衰」という言葉があるように、栄えると滅亡し、盛んになれば衰えるという変化が陰陽の流れであり、またその背後にある移ろいの中にも変わらないものが脈々と流れている。このように、森羅万象が変化する要素と変化しない要素から構成されており、それを易占という方法論を通して、簡明に分析することで、道筋を得ることが出来るのである。その意味では、すべての現象には意味があり、何かを得れば、何かを失うことを理として存在しているのである。

未斎流の易断を応用して、心的現象論に近づけるならば、得た卦の内容を、あらゆる角度から検討し、依頼者（クライアント）の連想に沿って検討を加えていくことになる。それは夢分析の方法論と類似しており、夢分析では「夢を解釈してはならない」という考え方が根本にある。言い換えれば、易者が卦を自分なりに解釈してはならない。問いと出た卦を繋ぎ合わせ、クライアントの連想を重視し、セラピストの太極的宇宙観をベースにして分析していく。そのような方法で、クライアント自身が「腑に落ちる」ことがらを通し、それらをつなぎ合わせることで、闇の中にある一筋の光が見えてくる。

前述したユングは、ヴィルヘルム訳『易経』の序文を書くにあたって、二つの質問を易

経に発している（ユング、1983）。一つ目は「序文を書くという私の意図に対して、あなたはどう思いますか」と易経を擬人化して問うている。二つ目は、一つ目にでた卦について論じたユングが自分自身の行為についての問いである。それらの問いにより出てきた卦の分析を行うことで、易経の真髄に関わる心的現象論からの興味深い内容になっている。

筆者もユングにならって易をたて、易自体が占いの領域を超えた心理学的現象学であるかを示す試みをしてみたい。問いは「西洋心理学が中心の日本において、筆者が行っている気の心理臨床がどのような意味をもつのか」で、占ってみよう。易をたてる時、その結果がいつもの確なので緊張が走る。筆者は易を聖なる儀式の一つとして捉えており、筮竹を触る前に必ず手を洗うことで心身の浄化を行っている。こころを静めて筮竹を両手に持つ。そして筮竹の一本（太極）を筮筒にたて、それを眺めるのである。この一本に「易の神様が宿る」と師匠が言っていたことを思い出す。両手に持った残り49本の筮竹を手の中で混ぜる。その感触と音に何とも言いがたい世界が広がってくる。この筮竹の中に、問いの扉が開かれ、その道筋が見えてくるからだ。扇状に開きながら、任意の場所で二つに分けるのだが、一気に分けられる時と迷いが生じる時がある。迷いが生じる時は分ける数本の空間に意味があるように思われる。それは気の流れが動くようであり、易自体の醍醐味だろう。ユング（1983）によれば、「私は易経の占いなどまぐれにすぎない、という考え方に対して批判的である。私の経験した明白な中数は、偶然による蓋然性をはるかにこえたパーセントに達していると思われる。易経において問題になっているのは偶然性ではなくて規則性であるということを、私は信じて疑わない」と述べている。

筆者の卦の結果は、下卦が地（☷），上卦が山（☶），であり大成卦は「山地剥」（☶☷），変爻は二爻目が陰陽が変換されたので「山水蒙」（☶☵）であった。大成卦は現在の状態を見るものであり、変爻の卦は今後の変容や視点を変えて見る時に用いる。また、1つの卦の前後の卦、例えば、「蒙」の前の卦は「賁」、後の卦は「復」も流れを見る一端になる。

筆者の大成卦と変爻の内容を、本田（1997）の易のテキストを参考にし、また引用しながら以下に説明する。そして、その説明を通して、心的現象論からの易断分析を試みる。


まず大成卦の「剥」（☶☷）の上卦の艮が山、下卦の坤が地であり、地上に高くそびえていた山が地に剥落した卦である。剥のキーワードは、剥落、浸蝕である。


「象に曰く、剥は、剥なり。柔剛をばざるなり。往くところあるに利あらざるは、小人長ずるなり。順にしてこれに止まる、象を觀ればなり。君主は消息盈虚を尚ぶ。天の行なり。」

大成卦の「剥」とは刀で削るという字であり、「剥落」という、はげおちる、はがれおちるという意味がある。下から陰爻が5つ続いており、陽爻が1つしかなく、陰の勢力は甚だしく大きく、ただ一つの陽に陰が迫っている卦である。柔（＝陰）が盛んになり剛（＝陽）が衰える時であり、小人（＝陰）の勢いが強いときであり、往くところに不利があり、時勢に順応して止まることも必要である。それは象を観察すれば分かることである。君子は、衰えると盛んになり、転じて、栄えたり衰えたりするの道理があることを知り、

行動することが天の道に沿った生き方である。これが「剥」の意味であると本田はいう。

この卦を得て、最初に連想したことは、現在の日本と中国との政治的な険悪な状態である。中国との政治的な険悪さが日本人にとって中国人や中国文化に対する否定的な感情を喚起させているのは事実であろう。以前日本では気功や太極拳の盛んだった時期があり、その時期と比較すれば、衰退しているといえる。それはブームが去ったとも、定着したとも両者が考えられる。心理臨床分野は現在、医療、教育、福祉、司法など様々な領域で要望され、子育て支援、高齢者支援、エイズ患者支援、など幅広く活動領域が増え、現場での対応に追われている。財団法人臨床心理士資格認定協会が発足し17年が過ぎ、臨床心理系の大学院も全国で120校を超え、国家資格になる動きもあり、随分発展してきた。また、西洋から輸入されてくる、様々な有効なセラピーがあり、どうしても西洋の方法論が中心になっている。そのような状況にあって、この卦の意味することは、東洋思想や「気」をキーワードに行う心理臨床は時期尚早であり、時勢が味方をしていないことになる。東洋的な視座が必要であるといっても、耳を傾けてもらえるほど、機が熟してしていないと卦は語っている。しかし、希望はある。河合（2000）は、心理療法において、「こころのことが問題なのだから身体のことを考える必要がないといった考え方は、あまりにも単純過ぎて実際とはそぐわない」として、心身相関の視点からの関わりと、その奥に潜むたましいへと到る心理療法の重要性を論じているからだ。臨床の場で、クライアントはこころの悩みを語ると共に、様々な身体症状を訴える。臨床家なら、誰もが身体の症状の訴えは姿を変えたこころの有りようだと経験的に知っている。東洋思想には、自然の中に人が存在し、人の中に自然が存在するという「天人相関」の考え方や、こころと身体は一つであるという「心身一如」の視座がある。筆者はこのような東洋の世界観から、西洋近代の二元論を超える新たな心理臨床を見いだすことの必要性を痛感している一人である。

剥の次の卦は（復 ) であり、陽が初爻に来ている。物が尽きることがあってはならず、陰から陽へと反転する。陽気はすでに坤の下に生じており、陽が一旦去って戻ってくる。先に剥落した君子の道が再び亨とおという卦である。陽が下に動き、道理に従って順に昇っていく。その意味では、陰の極みから陽に転じていき、危うかったものが安定へという流れが示されている。この卦も流れを読み解く一つの鍵になる。

次に、変爻で出た卦は「蒙（)」であり、近未来を表す。上卦が艮で山であり、止まるという意味であり、下卦が坎（かん）で水或いは険を示しており、山の下に蒙（くらい）場所がある卦である。蒙のキーワードは、おろか者、啓蒙、教育を意味している

「彖に曰く、蒙は、山の下に険あり。険にして止まるは蒙なり。蒙亨るは、亨を以ていき、時に中するなり。我童蒙を求むるにあらず、童蒙来たりて我に求む、志し応ずるなり。初筮は告ぐ、剛中を以てなり。再三すれば瀆けがる。瀆るれば告げず、蒙を瀆すなり。蒙は以て正を養う、聖の功なり。」

卦の象としての「蒙」は山の下に暗い洞窟のような危険な場所がある。外に進むことができないのは、上卦が止まるという意味がある。それゆえ、蒙おろかなものを示しているという。

ここで易経の用語として、陰爻を「六」、陽爻を「九」と称することを説明しておきた

い。「蒙」の(☶☱)の象は、下から初爻の陰は「初六」、二爻の陽は「九二」、三爻の陰は「六三」、四爻の陰は「六四」、五爻の陰は「六五」上爻の陽は「上九」と読み取っているのである。

下卦(☶)は陰-陽-陰となっており、「九二」の陽は下卦の主であり剛(陽)の性をもって「中」にあり、「六五」の陰(上卦の中)と対応する。これは人の蒙を啓く力があるといわれている。「九二」が「六五」の蒙を啓くには、亨るべき道を以て前進し、しかもその時々の中庸を得るからである。愚かな「六五」が賢明な「九二」を求めるのが理にかなっていることを表している。我とは「九二」を、童蒙は「六五」を示している。我童蒙を求むるにあらず以下は、占筮のことについて述べているという。本田(1997)は教育の道として見る事が可能だとして、「筮者である自分(九二)から出向いて幼い者(六五)に教えようとするのではない。当然、幼い者(六五)の方から自分(九二)に教えを請いに来るのである。」という。最初の易占は、剛中(九二-陽(剛)が真ん中)がすでにある。その意味では中庸を得ている。再三易占をすれば、告げるものが穢れるだけではなく、問う側も穢れる。蒙を啓く道は、^{ただ}真しくなくてはならない。それでもって聖人となるべき仕事であると本田は説明している。

生まれたばかりの事象は未熟でおろかなことが多い。筆者が提唱している「気の心理臨床」も、過去十数年心理臨床の場で実践してきたことを、本稿のように論文にまとめて作業を行っている。その意味でも生まれたばかりで、まだまだ未熟なものといえる。「気の心理臨床」が成熟していくのには時間がかかる。筆者の役割は最初の一步を踏み出すことであるが、今後、時代精神が要求しなければ、一步で終わるであろう。それも「気」に興味をもち実践する次世代の臨床家たちが現れなければ進化はしない。亨るべき道をもって前進するということを考えると「啓蒙」する意味が読みとれる。現在の心理臨床の領域で、東洋思想、東洋医学、気などのキーワードで実践と研究を行っている臨床家は、筆者が知る限り日本では数名しかいないのが現状である。彼らと共に次世代を育成する教育が必要ということであろうか。その意味でも、「蒙」という卦が変爻で出ても何ら不思議なことはない。それも、教育の仕方は自らが人を集めるのではなく、気に興味を持ち集まってきた人たちを教育すべきとこの卦は説く。かなり地道な作業である。

筆者の問いは「西洋心理学が中心の日本において、筆者が行っている気の心理臨床がどのような意味をもつのか」で占った。易学の専門家ではない筆者が自らの命題を自らが占うということであるため、主観に過ぎるという批判は免れない。しかし、大成卦と変爻の易断分析の結果をみれば、いかに未熟な技量でも『易経』が天地理を貫く地図であるかが、少しでも理解してもらえたのではないだろうか。

おわりに

気の思想の根底に流れるものは、万物生成の陰陽五行論と宇宙の法則性を示す易経に潜んでいると思われる。ユングが心理臨床に易占(『易経』)を用いていたという事実は、心理臨床家たちに新たな光を与えるに違いない。筮竹を分ける瞬時に起こる偶然性、いや

必然と考えられる。筮竹の四十九本の時空の中に、すべての真理を貫く気の働きがあることは、易に自らを託すときに明らかになってくる。このような考え方は近代科学からすれば、非合理であると言われるであろう。しかし、心理臨床という「こころの世界」に携わっていると、その非合理さが、時には合理的に働いているのも事実である。筆者は東洋と西洋という二元的な世界を問題にしていない。東洋に流れる普遍性を、「気思想」を通して、心理臨床に蘇らせたいと考えている。四千年の歴史の中で、おびただしい数の人々を経て発展してきた易経には、普遍的な無意識世界の蓄積が有るように感じられる。易をたてる瞬時に、答えは用意されているのかもしれない。

＜文 献＞

- 本田濟（1997）：易。朝日出版社。PP. 83～90, PP. 217～223, PP. 224～231.
- 伊藤未斎（1997）：易経の現代的解釈。未斎流易のレジュメから。P1.
 ♪ （1994）：未斎流易。日本出版企画株式会社。P315.
- 石田秀実（1992）：中国医学思想史。東京大学出版会。P81.
- Jung, C. G. (湯浅泰雄, 黒木幹夫訳) (1983)：東洋的瞑想の心理学。創元社。P273, PP. 288～289, PP. 306～307.
- 河合隼雄（2000）：心理療法における身体性。河合隼雄（総編集）、講座心理療法 第4巻。岩波書店。P. 3.
- 神戸中医学研究会（編）（1999）：第2版 中医学入門。医歯薬出版株式会社。P. 125.
- 黒木賢一（2001）：気のトランスパーソナル心理療法。諸富祥彦編、トランスパーソナル心理療法入門。日本評論社。P217
- 前川捷三（1978）：甲骨文・金文に見える気。小野沢精一・福永光司・山井湧編、気思想。東京大学出版会。P. 14.
- 三浦國雄（2000a）：不老不死という欲望。人文書院。P. 154.
 ♪ （2000b）：黄婆論、野口鐵郎（編集代表）三浦國雄、堀池信夫、大形徹（編集）講座道教第三巻。道教の生命観と身体論。PP. 161～164.
- 根本光人監修（1991）：陰陽五行。薬業時報社。P. 125.
- 廬玉起・鄭洪新編（堀池信夫・管本大二・井川義次共訳）（1993）：中国医学の気。谷口書店。P29.
- 仙頭正四郎（1993）：東洋医学——「人を診る」中国医学のしくみ——。新星出版社。P77.
- 高田真治・後藤基巳訳（1969）：易経（上・下）。岩波書店。P27.
- 山田慶兒（1995）：中国医学の思想的風土。潮出版社。PP. 124～127.
- 楊力（宮下功企画、伊藤美重子訳）（1992）：周易と中医学。医道の日本社。P65, P67.
- 吉野裕子（1984）：易と日本の祭祀。人文書院。P25.